

「3・11」新聞

写真は朝日新聞3月11日別刷り特集の西田敏行さんインタビューである。「問い直す、その先に未来がある」というタイトルで、西田敏行さんがふるさとへの熱い思いを語る。迫力と温かみ、そして人間味のある西田さんの演技は、大地に根ざす「役者」らしさを感じさせる。

以下のインタビューからも、西田さんらしさがよくあらわれている。

大震災直後の岩手県釜石市を舞台にした「遺体～明日への10日間」という映画に出たことがあります。遺体の仮安置所の手伝いを買って出た、元葬儀屋の民生委員役でした。



「死体ではない。ご遺体なんですよ」というせりふも強調しました。小さいころ、親戚の通夜で、母がずっと遺体に語りかけていた様子を思い出したからです。

私の故郷は、県のちょうど真ん中にある郡山市です。震災から半月後、郡山で友人たちと落ち合って、太平洋岸の南相馬市に車で向かいました。高さ10数メートルある橋まで津波が来たと聞いて驚きましたが、それ以上にショックだったのが、人影がまるでなかったことです。事故を起こした福島第一原子力発電所から30キロほどの場所でした。福島から宮城へと流れる阿武隈川が、子どものころの遊び場でした。原発周辺では、そんな川遊びもできなくなってしまったのです。

故郷にはかつて、「前の戦争ではえらい目にあった」と、太平洋戦争ではなくて戊辰戦争のことを指して言うお年寄りがいました。2年前の大河ドラマ「八重の桜」で私が演じた会津藩家老の西郷頼母も、そうした「えらい目」にあった一人です。新政府軍との戦いで、足手まといになってはならないと、妻や子どもたちが自害してしまうのです。まじめ一方の福島の人たちばかりがなぜ、歴史的な苦難を背負わなくてはいけないのでしょうか。

原発が再稼働されようとしている地域の人たちには特に言いたい。わが故郷・福島の人たちは「原発は安全・安心だ」とずっと信じてきました。でも、起こらないはずのことが起きてしまうのです。「俺のところは大丈夫だ」と本当に信じていいのですか？

(2015年3月14日)